

# 新聞記事のデジタルスクラップとその活用についての研究 ～主権者教育における意見形成を軸に～

十文字中学校・高等学校 地歴公民科

浜 彰史

他 1 名

## 1 はじめに

本研究は、十文字高等学校3年生のうち、歴史を履修しない文系生徒の選択授業（呼称「教養社会」・4単位）における実践研究である。今回成果発表する「新聞のデジタルスクラップとその活用」については、研究を開始する1年前（2021年度）から、本年度にわたって継続しているものであり、2年間の変化や、今後のカリキュラムへの影響についても述べることとする。

## 2 本研究の目的

近年、社会において求められる能力のひとつに「発信力」がある。授業担当者は、2020年度、高校3年生を担当した。担任として、総合型選抜入試および学校推薦型選抜入試における、面接対策に苦慮した1年であった。入試の形態が大きく変わる中、自らの知識や意見形成が形にならないまま、難解なテーマで発信に臨み、悔しい思いをした生徒も多かった〔注1〕。ここが、新聞記事をリソースとした意見形成への出発点となった。

また、近い将来、社会人となることを見据え、発信力を伸ばすことも急務だと考えた。2021年度は、入学から2年間続けてきた探究活動を完成に近づけるとともに、発信能力を高めることを第一目標とした。本年度は、社会情勢として最も新鮮で、自らの意見形成が不可欠である主権者教育を軸に据え、主権者としての意識を高めるとともに、ほかの主権者に対して啓発する役割を担うことを目標に加えることとした。

さらには、新たに高校のカリキュラムに採用された「総合的な探究」について、本授業での実践が、先行研究としての役割を果たすよう、情報の調査・発表方法に配慮し、進めることとした。

## 3 前年度（2021年度）の授業実践

この年度の6年生（高校3年生）から、学年全員がタブレットPCを所持し、データをクラウド上に保管でき、学年からの連絡や返信、授業課題の提出をすることが可能になった。本授業では、このことを活用し、近い将来、生徒それぞれが活用することになる、ポートフォリオ作成の一部を担っていこうと考えた〔注2〕。

最初に、生徒・授業者・学年の三者が、調べたことや発表内容などを共有できるしくみ

を構築し（Google Classroomを活用）、授業のはじめは「誰が聴き手でもずっと話していただけるほど」生徒自身にとって関心の高いテーマを扱い、身近なところから発表スキルを強めていくこととした。最終的には、それぞれのテーマについて、社会に対する貢献度を検証するだけでなく、SDGs 17 テーマのいずれかに関連づけることを終着点として、知識の深化および他者の共感を得る発信力をめざす実践を開始した。なお、6年生は2学期で授業が終了するため、本授業におけるターム設定を「前期」「後期」とし、それぞれに課題を設け、成績を算出することとした。

### 3. 1 1年目・前期（2021年度の1学期）

「好きなもののプレゼン」と称して、前期課題を設けた。制作過程は以下の通りである。

#### ①プレゼンテーション計画書の提出

（4月末）

#### ②好きなものをマインドマップ化

（5月・図1）

#### ③パワーポイントでの中間報告

（5月末・写真1）

#### ④質疑応答と他者評価（6月初め）

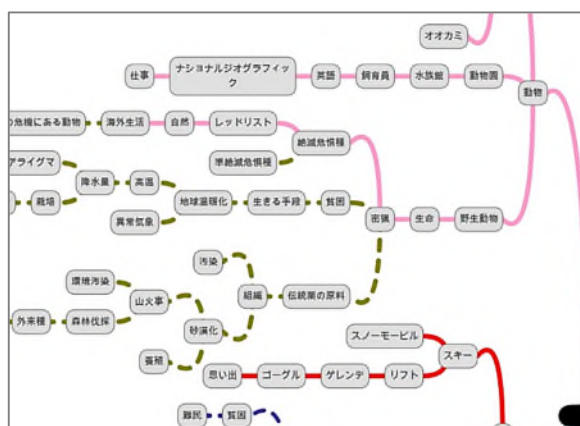
#### ⑤図書館などを利用し、資料を追加収集

（6月）

#### ⑥本発表と相互評価（7月）

#### ①～⑥を総合し、担当教員が評価

（1学期評価）



（図1）デジタルマインドマップの一部



#### 3. 1. 1 計画書

計画書は「自分がこれまで最も心血を注いできた」と考える趣味について、

とことん突き詰めるよう指導した。〈写真1〉血液型占いをテーマとした発表のようすただし、「他者へ明確に伝達し、内容と熱意の双方が伝わることを条件とした。

当初は、趣味をプレゼンにすることでテーマに迷いが生じたり、志望学部と直結する題材を優先しようとしたりして、関連事項が連鎖せず、踏みとどまる生徒が見られた。そこで、デジタルマインドマップを作成し、知識を発散させ、その後、整頓することにした。

#### 3. 1. 2 「好きなもののマインドマップ」

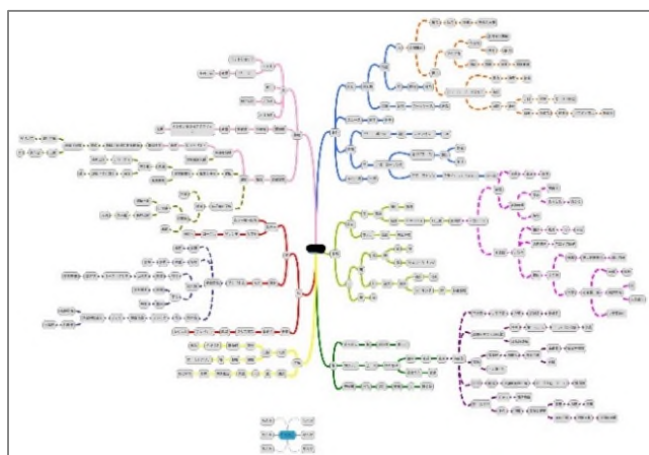
自分自身を中心に置き、複数の関心事を、整頓せずに発出させることを促すため、調査時

間中のアドバイスは「とりあえず思いついたことを全てやろう」に終始し、生徒自身が楽しんで取り組めるよう、「そのまま続けていいよ」を合言葉に、否定しない言葉掛けを心がけた。

なお、マインドマップの作成において、草稿以外はすべて Mindmap2.0 for Google Drive を使用した（図2・商標名は「Mindmap」ではなく「Mindmap」が正しい）。

前述の通り、高校3年生は、全員タブレット一体型パソコン（Microsoft Surface GO）を所持し、Google Classroom によって授業担当者と課題のやりとりができるようになっていた。高校2年の初めから、新型コロナウイルスによる休校期間に対応したこともあり、ICT の活用スキルに長けていたため、スムーズな情報交換につながった。本研究では、ペーパーレスで課題を提出させるだけでなく、提出フォルダを互いに共有し（クラウド上での閲覧を、授業履修生徒・担当者・学年教員にのみ許可）、いつでも仲間の調査結果を確かめ合うことができるようにした。

互いのマインドマップを確かめてからは、調査中の意見交換や、授業者・司書教諭に対する質問が増えた（5月以降、週1回・2時間を本校図書館閲覧室での授業とした）。



（図2）マインドマップの全体像

さらに、同アプリケーションでは、文献・新聞記事を、マップ上にリンクとして貼り付けることができる。この段階では、とにかく発表リソースを増やすことに留意した。多くの生徒は、インターネット上のリンク（新聞社ウェブサイトなど）を活用していた。他方、紙ベースの新聞記事をスキャンして取り込むこともできるように、大型のスキャナー（オーバーヘッドタイプ）を導入し、好きな記事

があった場合にはPDF化して保管するよう薦めた〔注3〕。

### 3. 1. 3 中間発表～相互評価

6月初旬からは、1人5分のプレゼンテーションと質疑応答を実施した。「評価用紙」を課題として配布し、返信（＝提出）させた。このシートは、生徒間で発表を評価できるようになっており、その評価もクラウド上に共有した（図3・閲覧できるのは、履修生徒と関連教員のみ）。

発表上の留意点として、時間を守り、超過しないように話を組み立てることを第一にした。もちろん、自分が話し切って「思い残すことはない」レベルの中身にするのは当然大切にしてきた。しかし、好きなことについて話をするとき、情熱を發揮するあまり、相手の関心が希薄となり、飽きさせてしまうことがある。

よって、中間発表では、限られた時間内に、情報を精選して伝えることで、わかりやすく、伝わるスキルに重点を置き、評価することにした。

### 3. 1. 4 追加調査～本発表

生徒たちが相互評価シートを仕上げる期間は、およそ1週間に設定した。

これは、評価シートの下部に、アイデア投稿欄を設けることで、「自分だったらこうするであろう」「あなたの発表から、この

部分をも参考にさせてもらいたい」(図3) 評価シート(Google スプレッドシートを活用)など、本発表に向けて、それぞれの生徒が出し合ったトピックを交換し、プレゼン準備に「協働」を取り入れたい、と考えたためである。

中間発表を記録した動画は、いつでも閲覧し、評価できるように、Google ドライブ上にアップロードし、リンクを共有した。このリンクは、クラス担任・学年主任とも共有されており、のちに、大学推薦入試の志望理由書、自己推薦書や面接のリソースとしても役立つことになった。

この時期には、調査時間中になるべくアドバイスを少なくするよう心がけ、進捗状況のチェック程度にとどめた。前述の通り、他者の進め方をすべて可視化したこともあり、目標を見失い、作業を進められなくなる生徒はほとんどいなくなった。

作業が停滞した場合にも、マインドマップや図を使った思考の整理をするようになった。

本発表で生徒に求めた要素は、大きく分けると、

- ①テーマが他者にわかりやすく発信されたか
- ②発表が、聴衆の知的関心を喚起していたか

の2つであった(図4)。そして、後期は、新聞など情報リソースの収集スキルを伸ばすことにした。

### 3. 2 1年目・後期(2021年度の2学期)

前期に作成した課題で得た知識を深化させ、ポートフォリオの一部として、完成度を高めることをめざした。後期課題「私とSDGs」の制作過程は以下の通りである。

1	6年組	生徒氏名	[REDACTED]				
2	教養社会中間発表 評価・アイデアシート						
3							
4	発表順	発表者氏名	テーマ			自分	
5	1	[REDACTED]	北欧インテリアと「私」				
6	わかりやすさ	非常に明確	わかりやすい	どちらでもない	わかりにくい	不明瞭である	
7			◎				
8	話者の熱量	よく伝わった	伝わった	どちらでもない	伝わりにくい	伝わってこない	
9		◎					
10	発表を通して気づいたことをまとめよう(疑問点・自分のテーマに対するヒントなど、建設的なもの)						
11	北欧以外にアジアのインテリアを比べていて違いが明確にわかりやすかった。						
12	イメージや聞いている人どう思うか聞いていて自分の意見と他の人の意見を取り入れてまとめていてわかりやすかった。						
13	聞かせるのは発表する時に自分で工夫できると思うので取り入れたい。						
14							
15							
16							
17							
18	発表順	発表者氏名	テーマ			自分	
19	2	[REDACTED]	ロケットの魅力				
20	わかりやすさ	非常に明確	わかりやすい	どちらでもない	わかりにくい	不明瞭である	
21			◎				
22	話者の熱量	よく伝わった	伝わった	どちらでもない	伝わりにくい	伝わってこない	
23							

(2) 本発表	
期 間:	6月28日(月) 2時間目・3時間目 6月30日(水) 3時間目 7月 1日(木) 6時間目 ※1回の授業あたり、3名割り当て
発表順:	くじ引きによる抽選により決定
時 間:	発表者1人あたり10分+質疑応答3分
内 容:	自分の「好きなもの」に関して、プレゼンで伝える (そして、聞く相手の関心を惹く) 形式は問わないが、実物にしてもデータにしても、発表内容を形に残すこと
評 価:	生徒・教員とも評価用紙を配布し、全員で発表者の評価をする
	①発表時間が10分(±1分)以内に収まっているか
	②テーマの内容が、他者から見てわかりやすいか
	③テーマの内容が、発表自身の関心(=「好き」の部分)を、聴衆に伝えようとするものであるか
	④発表の内容が、聴衆の関心・好奇心を喚起するものであったか
	⑤生徒からの質疑に対するの受け答えが明快かつ誠実なものであったか
提出物:	7月 5日(月) 13:00まで
	発表に使ったパワーポイントのデータ、配布したプリントのデータ
	作品の実物など、発表時に形にしたものを提出(データ添付でもUSBでも可)

(図4) 本発表の実施要項(PDFで配信)

①手書きマインドマップの作成

(9月・図5)

②SDGsデジタルマインドマップ

(10月)

③中間報告(10月中旬)

④関連する記事の収集・取り込み

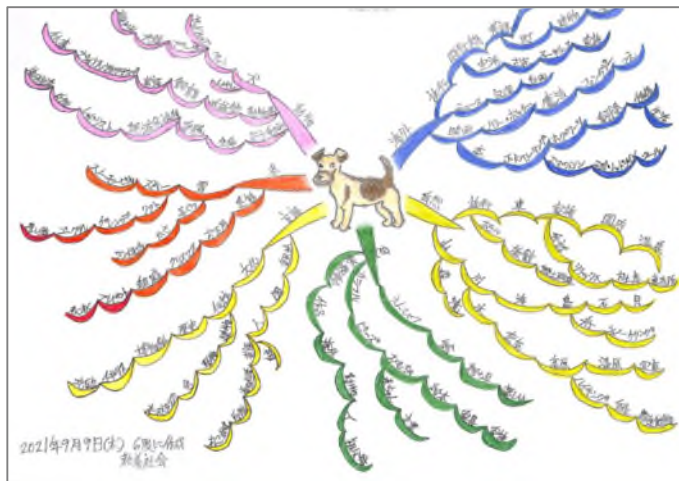
(10月下旬)

⑤本発表と相互評価(11月下旬)

⑥振り返り・アンケート(12月)

①～⑥を総合し、評価

(2学期評価)



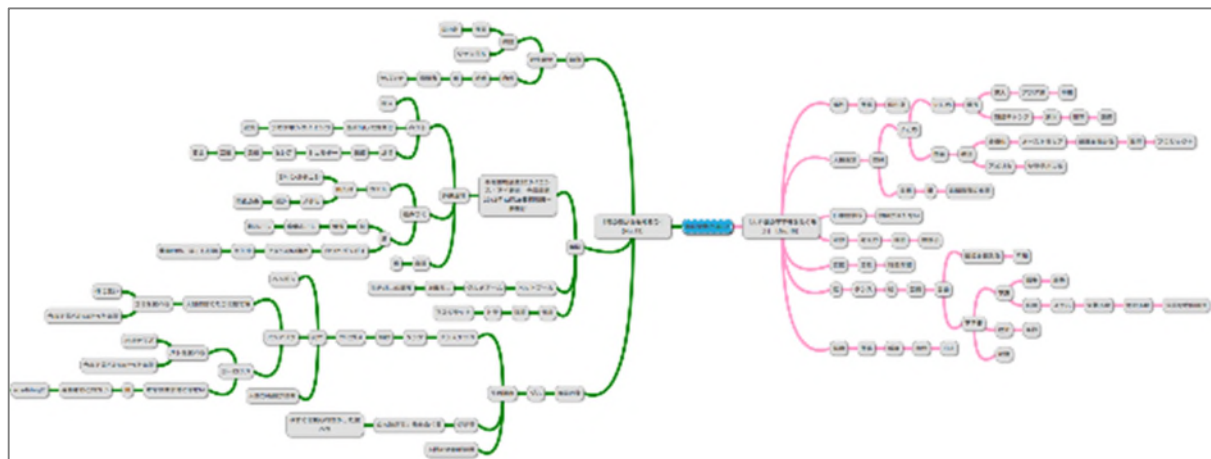
(図5) 手書きマインドマップ(「犬」を軸に)

### 3. 2. 1 2つのマインドマップ

「教養社会」では、夏休みの間、課題を課さなかった(発表の準備や文献の読み込み以外は、すべて授業内で実施・共有・解決することを基本方針とした)ため、2学期の最初は、1学期のプレゼンを踏まえた、テーマの整理を実施した。

まず、A3の白紙を使って、手書きで自由にマインドマップを描かせた。手書きの資料も、スキャナーや各自の端末に搭載されているカメラを利用し、画像化して保存・共有した。後期に入ると、互いの進捗状況を共有フォルダから確かめるようになり、作業はさらにスムーズになった。

次に、SDGs 17テーマから2つを選び、自分の設定テーマを中心に据えたデジタルマインドマップを作成させた(図6)。後期本発表の際、このマップを提示しながらプレゼンテーションするよう、作業を進めることとした。



(図6) SDGs デジタルマインドマップ(中心に自分のテーマが置かれている)

### 3. 2. 2 新聞記事調査

2021年度の実践における「柱」となるテーマが「デジタルポートフォリオ」と「新聞記事」である。後期は、知的関心の高い事柄に対し、知識的な根拠を持たせられるよう、設定テーマに関連する新聞記事を探す時間を割いた。

本校の図書館には朝日・読売・毎日・日本経済の4紙および英字新聞（Japan Times）がストックされている。直近のものは閲覧室に、過去のもの（紙媒体および朝日・毎日・読売の縮刷版）は地下書庫に保存されている。

そのほかの媒体も含め、生徒は以下の方法から記事収集をすることになった〈写真2〉。

- ①上記4紙のストック
- ②検索システム「朝日けんさくくん」
- ③縮刷版（朝日・毎日・読売）
- ④その他、授業者が適宜用意した新聞

これらの記事も、著作権に留意し、発表に盛り込むよう指導した。



### 3. 2. 3 中間発表～本発表

発表にあたって、前期と変更した点は、〈写真2〉縮刷版を見て、スキャン準備「マインドマップと新聞記事の使用は必須とする。ただし、パワーポイントは使用してもなくてもよい」であった。

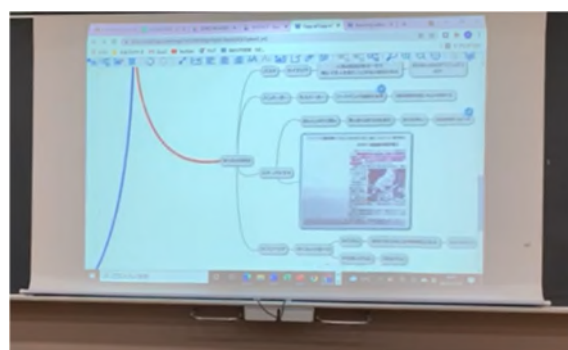
発表者のやりたいように表現する・伝えることを重視し、たとえば、紙芝居を使ってアナログにこだわるのも、ムービーにしてナレーションをのせたものを発表してもよい、とした。大学入試を視野に入れ、担任教諭と相談したうえ、年度当初の予定に付け加えた発表ルールであった〔注4〕。

## 3. 3 2021年度・評価

### 3. 3. 1 生徒の多面的なスキル向上

当該生徒は、デジタル共有・課題提出には慣れていた。無論、パワーポイントの技術も高かったが、マインドマップ作成ソフトについては、全ての生徒が初めての利用であった。

しかしながら、後期になると、授業者が使



〈写真3〉本発表のプレゼン画面

用方法を理解するよりも先に、生徒が拡張機能（色の使用・マークの種類など）を習得していることが多かった〈写真3・マップ上に記事がリンクされている〉。

また、この実践における第一目的ではなかったものの、プレゼンテーションスキルが向上したことにより、大学入試の面接で「緊張しなかった」「試験官に対して楽しく話すこと

ができた」という感想も多く、発表力を高めたことによる副産物としては、非常に意味のある収穫となった。

### 3. 3. 2 ポートフォリオ作成の一助となる

生徒たちは、高校1・2年の間、個人テーマ型の探究活動（総合学習）が必修となっている学年であった。この実践において、授業「単体」の目標は、新聞記事をエビデンスとした知識の醸成、および意見形成であった。しかしながら、学年担当の教員と授業の進捗状況を共有し、逐次話し合ったうえで、でてきた目標は「これまで2年間の扱ってきた探究テーマを完成させること」であった。ここが「ポートフォリオ」的側面である。

一方、探究活動のテーマを継続することで、授業単体のテーマ設定やプレゼンテーションが困難になった生徒がいた場合を考え、従来の探究とは別に、新しいテーマを設定することも可能にした。その際、重視した要素が「好きなもの」であった。

前期本発表のテーマ設定は右の通りである（図7）。約半数は「継続」組、残りは「新規」でのテーマ設定となった。

前者の方が深度の高い発表が多く、SDGsとの結びつきも強固なものであった。後者の場合、前期の発表が優秀だった一方で、後期はSDGsとの結びつきを見つけきれず、

題目
推しっていますか？
LDHアーティストの魅力
アトレティコ・マドリード
スポーツに影響を与える楽曲
頭に残る曲とは
血液型占いが海外で通用しないのはなんで？
日常で、犬も人も気持ちよく生きられるには
ディズニーリゾートの楽しさとは
ロケットの魅力
北欧インテリアと「私」

（図7）前期本発表のテーマ一覧

路線変更を必要とすることもあった。「新規」ながらも、深化させられた例としては、（図7）のうち「LDHアーティストの魅力」があった。EXILEをはじめとして、数々のユニットを輩出し、稀代のヒットメーカーとなったLDHグループの若手パフォーマーには「武者修行」とよばれる期間があり、社会福祉事業への参画などに勤しんでいたことを、発表を通じて知ることができた。生徒間のみならず、授業担当教員とも、相互に知識を交換できる要素が、生徒の発表には多く含まれていた。

文献収集を徹底したことにより、（新規・継続）どちらの組も、裏付けのあるプレゼンテーションになった。自分の記録（＝ポートフォリオ）と調査の証拠（＝新聞記事）との関連付けは達成できたと考えている。

### 3. 4 展望

次年度も、授業者の所属学年にかかわらず、この授業を担当できるよう、まずは本校地歴公民科からの承認をとることとした。そのうえで、新高3で履修する生徒には、発信力を高め、キャリアアップできる内容を準備する方向性を定めた。

好きなものにとどまらず、主権者教育など、時事項目を扱い、発信スキルを得た生徒を

「社会科学分野における知識のメッセンジャー」として、学年全体に啓発できるよう、実力を高めていくことを新たな目標とした。

#### 4 本年度（2022年度）の授業実践

本年度の6年生は、前年度とは違い、学年全員がChromebookを所持している。本校の生徒は、入学時に全員がGoogleおよびMicrosoft双方のアカウントを取得している。よって、端末がパソコンの機能を持っていれば、どれを使用しても、Google Workspace（ドキュメント・スプレッドシート・スライド）と、Microsoft Office（ワード・エクセル・パワーポイント）を利用できるようになっている。これにより、本授業では、Surface GOとChromebook双方における利便性の差を確かめる機会が生まれた。まずは、授業実践について報告し、次に、2年間の実践を比較・検証することで新たに生まれた評価について述べる。

##### 4. 1 2022年度「教養社会」概要

①授業名：教養地歴・教養公民（計4単位）〔注5〕

②対象生徒：6年（高3）進学クラス（15名）

文系のうち、地歴を履修しない生徒のみで編成。37名のうち22名が看護栄養系、残り15名が教養地歴公民選択者であった。

③生徒の進路希望：教育・芸術・留学・スポーツなど多岐に亘る（1学期の終わりから、カナダへ単位認定留学している生徒あり）

④キャラクター

：「元気」「チャレンジ精神」「よく喋る」ときどき「内気」で「弱気」である  
（発表においては「第1号」を待ち、それに追随する傾向あり）

##### 4. 2 NIE実践指定校としての活動

2022年度・23年度の2年間、東京都NIE（教育に新聞を）推進協議会の推薦により、NIE実践指定校となった。これにより、前年度と比べ、新聞記事の活用範囲が拡充された。



###### 4. 2. 1 新聞の活用状況（本校全体）

①「通りすがり新聞閲覧コーナー」の開設・展示 カフェテリア内・売店の通路に、6紙（写真4）カフェテリア内の新聞閲覧台の朝刊を設置した（写真4）。昼休み以外の時間は、高3の教室がある校舎（＝新館）1階廊下に移した。なお、新聞閲覧台は、読売新聞大塚集配所より1台が寄贈された〔注6〕。



## ②「アーカイブスコーナー」の設置

前日より前の新聞は、本館・職員室廊下に長机を設置し、2日分を机の上に、残ったものは机の下に箱を置き、6紙を（日付順に）整理・収納した。

## ③新聞の配送状況について

NIEの実践では、6新聞社（朝日・読売・毎日・日本経済・産経・東京）から4か月間（実質）無償で配送される〔注7〕。本年度は、教養社会で使用する時期を優先して、5～6月および10～11月の2期に分けて発注した。

はじめは、朝に設置した新聞紙が、放課後も変わらずきれいなままであった。やがて、高3（教養社会のメンバー以外）を中心に、コーナーに毎日立ち寄る「常連」が増えるようになった。毎日何かひとつは社会問題に関する質問を、授業者やその他教員にしてから帰る生徒も現れた。

## 4. 2. 2 新聞の活用状況（本授業において）



①届いた6紙を、新聞社・日ごとに整頓し、時系列で新聞を比較できるように準備した。教養社会の授業は、月・土の2連×2日で構成され、中でも、土曜は紙面を調べ、月曜はPC中心の作業とした。

毎週土曜日は図書館を予約し、文献も含めて閲覧・編集できるようにした。

〈写真5〉新聞ボックスから紙面探索する ②特定の日付について、各紙を比較できるように平たく並べた（スポーツの重大ニュースが出た日は、一般紙・スポーツ紙すべてで12紙比較の日もあった。「大谷翔平の2ケタ勝利と2ケタ本塁打」や、「ヤクルト村上の50号本塁打達成」などを採用し、取り上げ方の比較に活用した）。

## ③「朝日けんさくくん」が導入済み。

関心あるワードを検索し、紙面を印刷する生徒も多くいた。このアプリケーションについては、新たな発見があった。

### 【「けんさくくん」で「逆検索」】

同アプリケーションを使って検索し、日付を調べたあと、箱の中から新聞を探して詳細



〈写真6〉「朝日けんさくくん」の活用

を読み、記事のまとめを自分の端末に残す。再び図書館のPCに戻り、箱を探る…という方法をとる生徒も出てきた。(少なくとも授業者の私は)初めて出会う検索方法であった(写真6)。さらに、同じ日付の6紙を取り出して見比べ、記事の内容比較をしていた。



〈写真7〉閲覧室の机を活用した討論

④図書館を15名で利用し、1人1卓以上閲覧に使った。

これは、図書館閲覧室を活用するにあたり、技術的に大きなメリットであった(写真7)。新聞活用と直接的関係にはないが、担当教員に加え、司書教諭との対話をするが増え、その対話から、新たにアイデアが発生し、課題に取り組むためのモチベーションが向上した。図書館を閲覧で利用することが多い生徒と、図書館に立ち寄って話を聞いてもらうことが多い生徒が、相乗効果を生むこととなった。

#### 4. 3 前期(2022年1学期)・成果物までの過程

1学期の間、成果物に至るまでのスケジュールは以下の通りである。

##### ①好きなものプレゼン(5月)

好きな物を調べ尽くし、5分で発表する。その際「知識」「明解な説明」「情熱」「他者への共感」を評価軸として、教員・生徒を含めた相互評価を行った。

##### ②選挙タブロイドの制作(6月)

来たる参議院議員選挙について、有権者として自身の知識や意識を高めることに留まらず、同学年の生徒に対して、タブロイドから選挙を啓発することを目的とした。

#### 4. 3. 1 2022年「好きなものプレゼン」テーマ傾向

##### 【題材の例】

エデルソン・モラレス(サッカー選手)	ダイヤのA(野球アニメ)
しょうやん男三兄弟(YouTube番組)	にじさんじ(YouTuber)
ENHYPEN(エナイプン・K-POPアーティスト)	ローマの休日(洋画)

本年度「好きなものプレゼン」では、授業者も全力でプレゼンすることとした。ちなみに、テーマは「日本シリーズ～ヤクルト対西武・30年の時を経て」であった〔注8〕。

#### 4. 3. 2 選挙タブロイドの制作

まず、「タブロイド」とは、「タブロイド判」と呼ばれる小型の新聞のことである(対して、一般紙の大きさは「ブランケット判」と呼ばれている)。横書きで段組みの体裁が取り

やすく、掲示したときにも閲覧してもらいやすいサイズであること、加えて、普段から使用している端末内のアプリケーション（Google ドキュメント、または Microsoft Word）で扱いやすいことも考慮し、サイズとして採用した。この授業では、A4 サイズ・1 枚のタブロイドとした。

テーマ設定の作業では、意見表明や思考に偏りが出ないように留意した。

- ①特定の政党に対して声高な記事にならないこと
  - ②同様に、特定の政治家に対して肩入れしないこと
  - ③特定の存在を中傷しないこと
- 以上に加え、
- ④投票行動を強制しないこと を条件にして、テーマ設定に入った。

#### 【テーマの分散傾向】

参議院議員の前職	世界と日本の国会議員の男女比率
日本の女性差別	各党の政策比較
防衛費	日本が必要とする外交・安保とは
消費税について	消費税×物価と各党の公約
参議院ってなあに？	都道府県別投票率について
10代が選挙に行かない理由	
安保法制	選挙とSNS
若者が選挙に行こう！！！！	

以上のように設定されたが、テーマが固まるまでには、長い時間を要した。また、記事制作中にテーマ変更する生徒もいた。この間（4時限程度）、授業者は見回りながら、「いいんじゃないかな」「いいと思う」「そんな感じよ」を繰り返すことを徹底した。

生徒としては、初めこそ不安だったはずだが、毎回の授業でこまめに巡回したこと、質問をできるだけ多くさせたことが上手くいき、一定以上の根拠と自信をもって記事作成に臨むことができたと考えている。

### 4. 3. 3 中間発表プレゼン

まず、2022年の6月に起きた、ネットワーク障害について触れる。6月初旬に、約5日間にわたって本校のWi-fiが機能不全となり、課題配信・作成・提出から発表動画のアーカイブまで完全にデジタル化した本授業は、月・土の2回、手書きのまとめシートを作成させたり、授業者自身が大学で実施し、卒業研究をどのように進めたかという話をしたりしたが、作業の出遅れにより、タブロイドの情報収集から完成までの期間は、4週間となってしまう。

成果物も含めて、全てをGoogle Classroomによって提出・回収・評価して一元化しているため、通信トラブルへの課題は常に想定していなければならない、と痛感したできご

とであった（一方で、Classroom とドライブでの管理により「生徒同士の成果閲覧」「発表演画の確認」「前年度の作品との比較」など、役立つ作業項目のほうが多いことも事実であるため、今後も、デジタル端末の活用スキルを向上させていくことが第一であることに変わりはない）。

さて、6月第2週から、1週間に1回、ひとり30秒～1分程度、作業状況を発表することにした。

- ①テーマの深まり具合
- ②情報収集の具体的方法
- ③現時点での成果・反省

これらをコンパクトに話し、再び作業に戻ってから毎回の授業を終えた。思い返せば、この「ミニプレゼン」によって、進捗状況の遅れがわかり、ギリギリになって焦ることが防げたと感じる。焦っている生徒が「無理」と嘆けば、進みの速い生徒がフォローしはじめた、とも言える〈写真8〉。

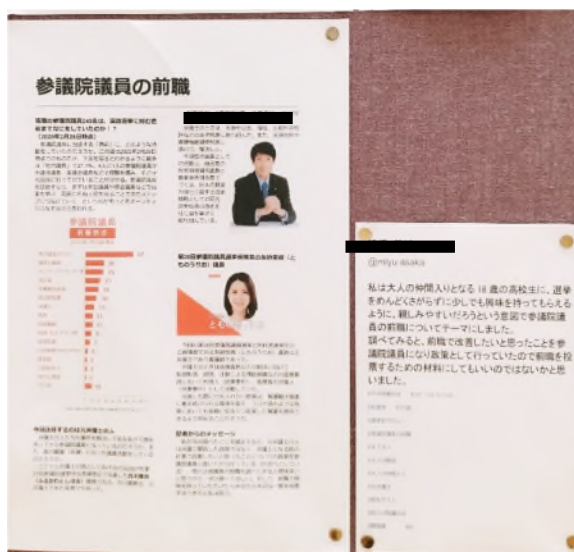


〈写真8〉生徒間のフォローアップ

#### 4. 3. 4 成果発表

##### ①タブロイドの提出と「再提出」

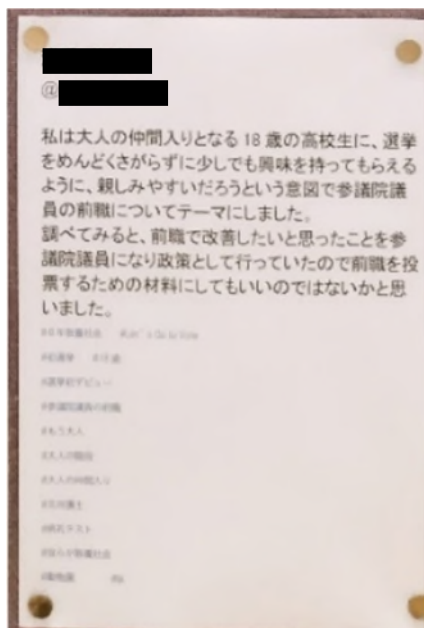
まず、6月末日に、PDFによる提出を求めた。担当教員によるアドバイスと、著者自身による校正を経て、次の回に再提出させることで、掲示物として問題ないレベルの内容になったと考えている。この課題は「知識」「明解な説明」「情熱」「他者の共感」を評価軸として、教員が評価した。



〈写真9〉完成したタブロイドの一例

②掲示物に対する「つぶやき」の追加  
制作過程の中で感じたことは、タブロイドの記事に編集者（＝制作した生徒）としての意見・感想を入れようとすると、制作したことに対する率直な感想や、自分が努力した点のアピールを書く紙面が足りない、ということがわかった。

- ・デジタル機器で紙の新聞をまとめる
- ・しつこくない範囲で気持ちを伝える
- ・「選挙JK（生徒自称）」特有の書式などの要素を考え、Twitterに女子高生が選挙の意思をつぶやく体裁を提



案したところ、積極的に取り組んだ。和文で140～150字。ハッシュタグも利用した〈写真9〉〈写真10〉。

### ③参議院議員選挙「最後のお願い」

そして、期末試験最終日となった7月9日、投票日の前日に、履修生徒が2チームに分かれて、学年7クラスを訪問した〔注9〕。選挙投票日のお知らせと、この日の一週間前、生徒昇降口に掲示したタブロイド〈写真11〉を、もう一度見て下校してもらうことをアピールした。

この際、「投票に行きましょう」「投票して下さい」を直接的には使わずに声かけしよう、と計画した。

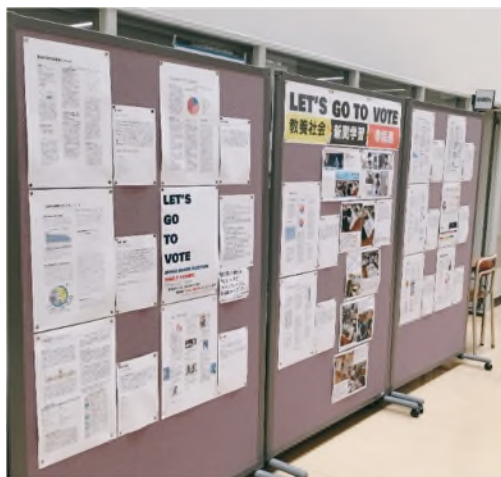
「大人の階段を上ろう」

〈写真10〉編集後記

というかけ声に対する、教室内からの（迷いを含んだ）

「おお」小声のエールが印象的であった〈写真12〉。

また、「有権者のかたはどのくらいいますか？」と挙手を求める場面もあった。これは場のモチベーションを高める行動であり、投票行動の強制につながるものとは考えておらず、事前に生徒から「これは大丈夫ですか」という質問があったことに対しては、実施しても問題ない、とし、自分たちが計画した通りに実行するよう指導した〔注10〕。



〈写真11〉昇降口でのタブロイド掲示



〈写真12〉「最後のお願い」のようす

## 4. 4 後期（2022年度2学期）・成果物までの過程

2学期の間、成果物に至るまでのスケジュールは以下の通りである。

### ①「わたしの街、ココが好き。ココは言いたい～衆院選に向けた選挙区リサーチ～」

（9月～11月）

近い将来、必ず実施される衆議院議員総選挙について、自分が住む「自治体」に着目し、ここに期待すること、課題として取り組むべきことを、タブロイド制作を通じて全校生徒

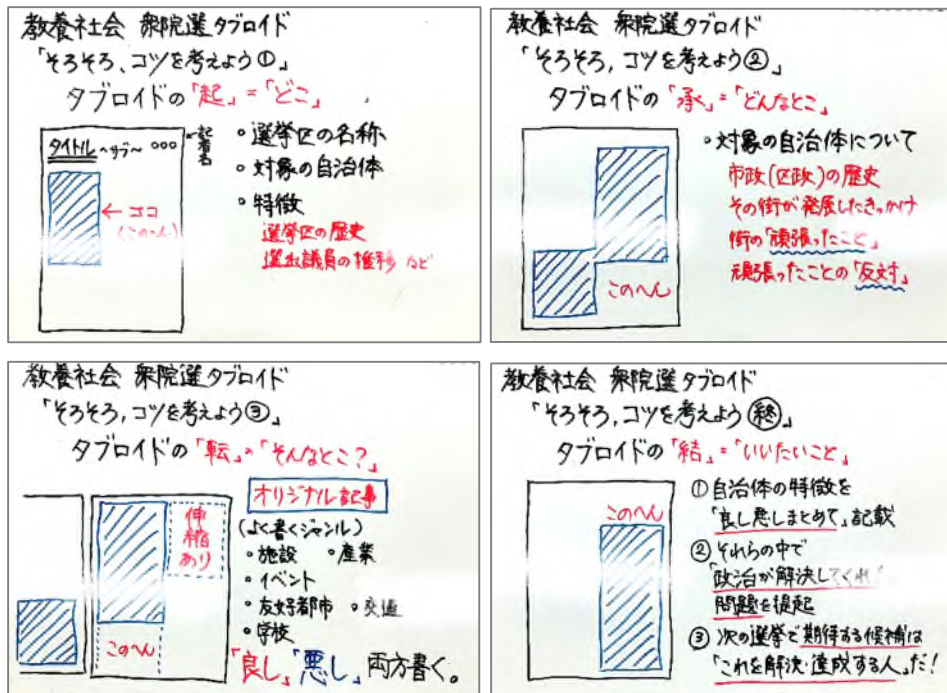
に知らせることとした。

## ②投票傾向アンケート（11月～12月）

7月に実施された参議院議員選挙について、同学年の生徒のうち、有権者がどの程度投票しに行ったか、さらには、投票前に自らのタブロイドを参考にしたかどうか調査し、数値化した。

### 4. 4. 1 衆院選に向けた「選挙区タブロイド」の制作

#### ①指導上の留意点



〈写真13〉授業者による「タブロイドのコツ」（簡易ホワイトボードによる）

前期と対比する形で、後期は衆院選を取り上げた。前期は、白紙の状態から、個々の生徒に対する質疑応答で紙面を作り上げていったが、後期は、A4で2面を課したこともあり、ある程度紙面の道筋を提示してから、作業の部分を生徒間の協働に委ねた。その際、黒板の代わりに、簡易ホワイトボードを使用した〈写真13〉。このホワイトボードについては、生徒分も購入して活用を試みた。本項③にて詳述する。

#### ②タブロイド制作

後期のほぼすべてをかけて、「衆院選タブロイド」を制作した〈写真14・15〉。衆議院議員総選挙では、小選挙区比例代表並立制が採用されており、履修生徒たちも、近い将来には当該の自治体から立候補した人物の誰かに投票することになる。（もし、当日に白票を投じることになったとしても）地元の立候補者がどのような背景で現職を務め、いかなる成果を出しているのかは、必ず知っておいてもらいたいと考え、題材として設定した。

## みらいにずっとほこれるまち

### ～新しいまちづくりを目指す町25区～

自治体→西多摩郡瑞穂町  
選挙区→25区



**●選挙区東京25区**





**●行政区域**  
2017年公職選挙法改正以降、区割り変更により、21区に属していた瑞穂町が加わり、青井町、福生町、羽村町、あきる野市、西多摩郡(瑞穂町、日の出町、檜原町、奥多摩町)が東京都25区。

**●小選挙区選出議員**

選挙区	年	当選者	所属
第41回衆議院議員総選挙	1998年	石川三三三	自由民主党
第42回衆議院議員総選挙	2002年	石川三三三	自由民主党
第43回衆議院議員総選挙	2005年	石川三三三	自由民主党
第44回衆議院議員総選挙	2008年	石川三三三	自由民主党
第45回衆議院議員総選挙	2012年	井上徹治	自由民主党
第46回衆議院議員総選挙	2014年	井上徹治	自由民主党
第47回衆議院議員総選挙	2017年	井上徹治	自由民主党
第48回衆議院議員総選挙	2019年	井上徹治	自由民主党


1998年から自由民主党。  
2003年から井上徹治が当選。  
\*井上徹治\*



●瑞穂町のポイント・課題  
①交通手段が少ない  
→現在、瑞穂町には駅が八高線瑞穂ヶ崎駅のみ1つしかなく、通勤時の交通手段は以下の通りだ。  


●瑞穂町の子ミット・課題  
①交通手段が少ない  
→現在、瑞穂町には駅が八高線瑞穂ヶ崎駅のみ1つしかなく、通勤時の交通手段は以下の通りだ。  


●瑞穂町の未来  
①給食がおいしい、給食費が安い  
→瑞穂町の未来を担う子どもたちの健やかな成長に寄与するために、羽村・瑞穂地区学校給食組合給食費(保護者負担費)について、昨今の食材高騰による給食費の値上げを抑制し、保護者負担の増大を防止し、子育てを支援するための給食費に追加の負担を減らす。  
②モーガンヒル市との姉妹交流  
平成18年7月3日に瑞穂町はアメリカのモーガンヒル市と姉妹都市提携を締結。また、町では、お互いの理解を深めることで日本とアメリカ双方の良さを知り、国際感覚を養うことを目的として、中学生の交流事業を行っている。  
③全ての学校の校庭が芝生  
天候による校庭緑化は弾力性・柔軟性にかき、み、枯れしてもグランドの役割を果たす。それにより、生徒が少なくも階段に安全で、体育活動が活発となり、運動能力の向上が期待できる。



-5.02%  
(8)0.75%  
3.高齢化率(65歳以上・2020年)  
30.00%  
(8)28.00%  
(8)全国平均

●次選挙区で期待する人  
瑞穂町の一層の発展は交通網の整備と私は考える。したがって、現在計画している多摩モレールの延伸やJR各線の改善、多摩モレールの延伸に取り組みでそれらと井上徹治(現25区選出議員)に期待する。交通が発展し、通勤・通学がしやすい町を作りたい。

●参考文献  
[https://www.town.mizuho.tokyo.jp/hyousei/02/09/p001418\\_gf/shikouyosonken/02202401.pdf](https://www.town.mizuho.tokyo.jp/hyousei/02/09/p001418_gf/shikouyosonken/02202401.pdf)  
[https://www.town.mizuho.tokyo.jp/hankyo/04/03/0005658\\_4f/moonrail/P5-P14.pdf](https://www.town.mizuho.tokyo.jp/hankyo/04/03/0005658_4f/moonrail/P5-P14.pdf)  
<https://www.3nh.or.jp/shutoken-news/2021026/1000086186.htm>

〈写真14〉東京25区(瑞穂町)をテーマとしたタブロイド

## より良い中野をめざすには ~東京10区~

**私の住む自治体、選挙区**

衆議院選挙の区割り(2017年)から変更され、以前は中野区の全域が東京第7区だったが現在は7区と10区に分かれている。  
私が住んでいる地域は新たに10区に分類された。

**区割り変更で四つの区にまたがる東京10区**



**中野区における衆議院議員の変遷**

選挙区	年	当選者	所属
第41回衆議院議員総選挙	1998年	藤田 隆雄	自由民主党
第42回衆議院議員総選挙	2002年	藤田 隆雄	自由民主党
第43回衆議院議員総選挙	2005年	藤田 隆雄	自由民主党
第44回衆議院議員総選挙	2008年	藤田 隆雄	自由民主党
第45回衆議院議員総選挙	2012年	藤田 隆雄	自由民主党
第46回衆議院議員総選挙	2014年	藤田 隆雄	自由民主党
第47回衆議院議員総選挙	2017年	山下 洋平	自由民主党
第48回衆議院議員総選挙	2019年	藤田 隆雄	自由民主党

この表は中野区を中心としてみた衆議院議員当選者の変遷である。この表では2014年までは第7区の当選者、2017年からは第10区の当選者を表している。  
ここでは現在の当選者である藤田隆雄議員について紹介している。

**自由民主党 藤田隆雄**  
主に中小企業政策、社会保障、行政改革などの分野で活躍!!

- 経歴
- 1977年 8月8日 45歳
- 2000年 東京大学卒業
- 2002年 東京大学大学院修了、経済産業省入省
- 2014年 経済産業省退職 衆議院議員初当選

●実績  
『認知症基本法』策定、子ども基本法』制定など  
選挙区のミット・デメリット

●スーパーやお店の充実  
日用品などを安く買える店が多い。

●狭い道路が多い  
大通りが多い反面、大通りを一本入ると狭い道路が多いため、車の移動は不便。

**中野区の未来への課題**

**安全安心で持続可能なまち**  
中野区は狭い道路や木造住宅密集地域が多いため、災害時における被害の拡大が懸念される。  
●目指す姿  
安全安心かつ  
災害に強く回復力のあるまちづくり

**子どもの育ちを支えるまち**  
様々な支援や対策が増えてきているが、まだまだ努力が必要。  
●目指す姿  
子どもの育ちを未来で支えるまちづくり  
地域全体で支えるまちづくり

**生活を楽しく自分らしくいられるまち**  
少子高齢化が進む中で子育ての区民が自分らしくいられるためには何が出来るか。  
●目指す姿  
病状や障がいがあっても  
自分らしくいられるまちづくり

●参考文献  
中野区基本構想  
<https://www.city.nakano-nakano.lg.jp/dep/1015003003/0307.htm>  
東京都中野区への移住【ミット・デメリット】  
<https://www.s10mag.com/shikyo/nakanokyo/>  
衆議院小選挙区区割りについて  
<https://www.city.nakano-nakano.lg.jp/dep/7111000402/4533.html>  
衆議院議員 藤田隆雄 Official Site  
<https://www.suzukihayato.jp/>  
東京10区候補者一覧  
<https://tsujinaka.echibankei.com/48/nakanyku/38862/>

〈写真15〉東京10区(中野区)をテーマとしたタブロイド

したがって、この場合の個々のテーマは「小選挙区とその自治体」に決まった。ただし、自治体における公共サービスやインフラには差があり、生徒が仕上げる記事の内容差にも

影響する可能性がある。そこで、2面の構成については「選挙区の概要紹介」「メリット」「デメリット」および「わたしの街から国政に出る議員に期待すること」という大まかな構造を示し、制作指導を始めた。

選挙区の概要説明においては、必ず現職の小選挙区選出議員のプロフィールを、できるだけ詳細に示すよう指導した。授業者自身の経験から、中高生のころに小選挙区で選挙活動をする候補を注視することが、将来の投票傾向に大きく関わること、また、地元から国政に出る人物に対して、陳情などで直接かかわることができるかもしれない、という主権者意識の「種」の醸成につながると考えていたためである〔注11〕。

### ③ 1分間「手書き」プレゼンと簡易ホワイトボードの活用

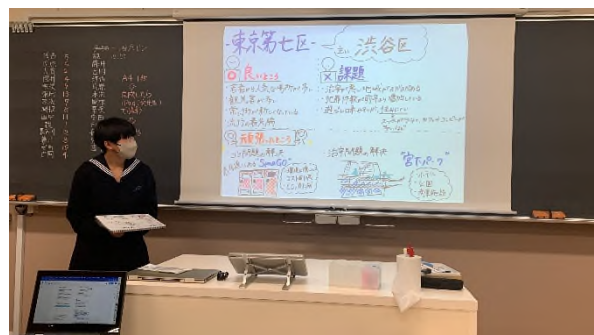
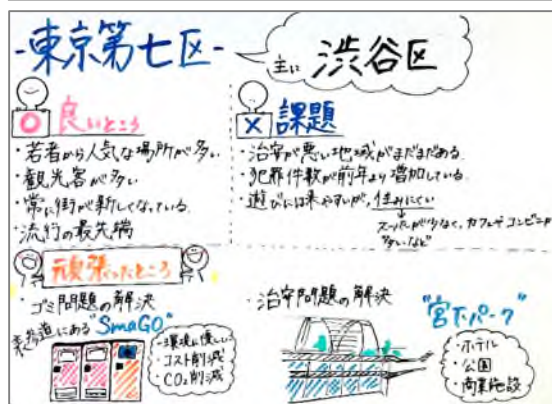
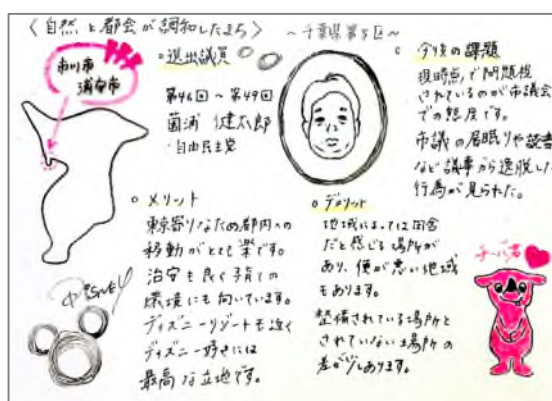
前期の「参院選タブロイド」には、教養社会なりの特色を出した「ツイート」を添え、発表者の自己紹介的役割を持たせた。

今回は、前述の簡易ホワイトボード（欧文印刷株式会社製造「Nu Board（ヌーボード）」）を使用した。〈写真13〉は、授業者がコロナ休校期間に、自宅から授業配信をするために使用し始めた、同商品のA3判である。生徒人数分、A4判および各色マーカーを購入し、1面で完結することを条件に、衆院選タブロイドのまとめを制作した。最終授業では、まとめについて、1分間の発表をすることにした。

「Nu Board」は、リングファイルの形状を持ち、紙製のホワイトボードが4枚綴じられたものである。各ボードには、透明なアクリルシートが上から重ねられるように綴じられており、マーカーで書き入れることが可能である。地図・イラストなど効果的に見せる工夫が、随所に見られた。

### ④ 動画の作成

本年度の実践では、次年度の高3生に授業紹介するため、また、3月に卒業する本年度の履修生徒にとって、努力の足跡と思い出を残すために、動画を作成することとした〔写真18〕〔注12〕。



〈写真18〉制作した動画の一場面



#### 4. 4. 2 投票傾向アンケート

Q1 あなたは有権者でしたか		Q2 参院選に投票しましたか		Q3 タブロイドを読みましたか	
①はい、有権者でした (投票総数比) 27.21%	40	①はい、選挙に行き、投票しました (有権者比) 70.00%	28	①一人一人の作品に目を通した	1 3.57%
				②立ち止まって全体を見渡した	3 10.71%
				③通りすがりで何回か見た	10 35.71%
				④通りすがりで1回程度見た	2 7.14%
				⑤掲示は見なかった	1 3.57%
				⑥掲示があることすら知らなかった	11 39.29%
		②いいえ、行っていません (有権者比) 30.00%	12	①一人一人の作品に目を通した	1 8.33%
				②立ち止まって全体を見渡した	1 8.33%
				③通りすがりで何回か見た	2 16.67%
				④通りすがりで1回程度見た	2 16.67%
				⑤掲示は見なかった	1 8.33%
				⑥掲示があることすら知らなかった	5 41.67%
②いいえ、有権者ではありません (投票総数比) 72.79%	107	①はい、選挙に行き、投票しました	0	①一人一人の作品に目を通した	1
				②立ち止まって全体を見渡した	2
				③通りすがりで何回か見た	3
				④通りすがりで1回程度見た	4
				⑤掲示は見なかった	5
				⑥掲示があることすら知らなかった	6
		②いいえ、行っていません	107	①一人一人の作品に目を通した	5 4.67%
				②立ち止まって全体を見渡した	13 12.15%
				③通りすがりで何回か見た	21 19.63%
				④通りすがりで1回程度見た	13 12.15%
				⑤掲示は見なかった	19 17.76%
				⑥掲示があることすら知らなかった	34 31.78%
投票総数	147	68.06%		未記入	2 1.87%
学年	216	(学年比)			

(図8) 投票傾向アンケートの結果

##### ①アンケート集計結果からの考察

11月から12月にかけて、6年各クラスの協力を得て、参院選・投票傾向アンケートを実施した(図8)。各質問項目において最も高かった数値は赤字で示した。

7月10日時点で有権者となっていた生徒のうち、投票した者は7割を記録した。その生徒に、掲示を見たかどうかを質問すると、「掲示があったことすら知らなかった」が39.3%、次いで、「通りすがりで何回か見た」が35.7%となった。

##### ②履修生徒による「アンケート振り返り」

###### 【質問：アンケートの結果を見て思うこと】

- ・見てくれる人がいると思わなかったからびっくりした。有権者がまだ少ない割にはみんなみてくれたと思うので嬉しかったです。
- ・自分なりにいろいろ工夫して新聞を作ったし、みんなの新聞によって、選挙に動きが出ると思っていたので、もう少し有権者の中で選挙に行ってくれたらよかったな、と思いました。
- ・置いてあったことすら知らなかった人が多かったのは、意識して周りを見ていないと気付かないためだと思う。自分でも、言われないとスルーしてしまったと思う。

###### 【質問：ここはもっとできたな、と思うこと】

- ・読む側にとって読みやすいように作れたらよかった

- ・情報が多すぎて、スッキリまとまっていないところが多かったな、と思った
- ・もっとみんなの目に留まる、もっと目立つ構成にしたかったです
- ・クラスに1セットずつ掲示すればよかった

数値を見せた時には、「頑張って作ったのに、見てくれなかったのか」と涙を浮かべる生徒もいたが、文字に残すと、みな真摯な振り返りをしていた。この生徒たちができた活動は1回きりであったが、今後、それぞれが新しい社会で、文章作成能力や発表能力を発揮する足掛かりは構築できたと思える結果であった。また、次年度に高3となり、新たにこの授業に取り組むであろう生徒にとって、2022年度「チーム教養社会」の活動は、大いに参考になるものであった。自らのスキル、そして、後輩の足掛かりという2点において、「知識のメッセンジャー」という役割を果たしたと考えている。

#### 4. 5 NIE×「主権者教育」の相乗効果をもたらした、メディアとの関わり

本授業に対し、数回にわたって、各種メディアからのアプローチがあった。ここに列記しておく。

##### ①TOKYO MX（7月）

本年度の実践について、本校広報から「タイムリーな話題である」という意見を頂戴し、広報を通じてPR業者へアピールしたところ、2022年7月4日（月曜日）、前期の最終授業が同局のテレビ取材を受け、参院選に向け「18歳選挙権を意識した授業」として、同日夜のニュース「NEWS TOKYO FLAG」にて放映された。

##### ②産経新聞（9月）

本年度、後期の実践について、授業見学および、生徒の主権者にまつわる関心について取材を受け、9月17日（土）朝刊・NIE特集記事として掲載された。

##### ③毎日新聞（12月）

同じく、後期実践の最終プレゼンを準備する段階で取材を受けた。このようすは、12月26日（月）朝刊に、NIE特集記事として掲載された。

②③とも、生徒が扱ったテーマについて、各記者は入念な予習をしたうえで質問がなされた。生徒は、この受け答えにおいても、熟慮して、答えをまとめるよう努力していた。

また、事前の打ち合わせで、取材のみならず、新聞を制作するポイントをアドバイスしてもらえるよう依頼したところ、両記者から快諾いただき、出前授業の要素を取り入れることができた。この場をお借りし、産経新聞東京本社・毎日新聞東京本社取材関係者の皆様に感謝の意を表したい。

#### 4. 6 本年度・実践に対する評価（前年度との比較を含む）

##### ①生徒による評価（授業アンケートより）

1年間の最終授業で「6年教養社会・ふりかえりシート」と題したアンケートを実施した。その中で「教養社会と地あたま」という項目を設け、2つの質問をした。それぞれに対する回答は以下の通りである。

【質問1：この授業を通じて「自分が（良い方向で）変わったな」と思う点はどこですか】

- ・パソコンの使い方（ドキュメント・ワードの使い方）がうまくなった
- ・情報収集のスピードが速くなった
- ・1つのことについていろいろな見方をするようになった
- ・情報をすべて鵜呑みにしなくなった
- ・街を歩いているだけでも、政治や地域のことに興味がなかったが、最近何かあると気にしてみようになった
- ・緊張が相手にも伝わるような発表だったのが、だんだん落ち着いて、表情にも少しゆとりがもてるようになった
- ・わからないことを、わからないままにしないで追求することが多くなった気がする
- ・最寄り駅で演説している人に対して、人物を気にしたり、話に耳を傾けたりするようになった
- ・「わからない」と言いやすい状況が（授業の中に）できていて、社会に出て役立つ知識を得られた

【質問2：この授業を通じて「自分のここは変わらなかった」と思う点はどこですか】

- ・タイピングの速度      ・時間配分
- ・家庭で新聞を取るようにはならなかった
- ・「ギリギリまで構想して、文章を書きだせない」というループ
- ・プレゼン能力              ・集中力

##### ②授業者から見た評価

2022年度の実践評価にあたっては、以下の軸を挙げ、それぞれ、生徒アンケートの回答も踏まえて、前年度と比較して詳述する。

###### (a)生徒の過程・成果を授業者・担任・学年で共有した

前年度と同じように、Google Classroomに配信した情報を、履修生徒・授業担当者・学級担任・学年主任との間で見られるよう設定した。これには、普段の進捗状況を確認することよりも、志望校選定や、入試における面接対策などで、本授業で取り組んだ課題を活用してもらえればよい、という意味合いが強かった。

ただ、前年度と比べ、主権者教育に重点を置いたため、大学入試へのアプローチは希薄

になった。「教養社会」が、近い将来、有権者としての意識を高める授業になったことについては、確かな感触を掴みつつあるが、授業内の取り組みを、生徒それぞれのポートフォリオに落とし込み、活用するには、志望理由書への記述など、進路に合わせた指導が必要であった。

(b)発表までの段階で、協働の場面を多くとることができた

生徒のアンケート回答にもあるように、「わからない」と言いやすい雰囲気が出たことは、情報収集や制作を進めるにあたり、大きなメリットを生んだ。

前年度は、個々のテーマが趣味や特技をベースとしていたため、生徒から教員に対する質問は多く、決して質問しづらい雰囲気ではなかったと考えているが、本年度は、全員が「選挙」「政治」「地域」という大きなテーマを共有していたことから、毎回の授業で、類似したテーマの生徒同士と一緒に動いたり、選挙区の調査で、互いの長所・短所を比較検討したりする場面が常にあった。主権者教育というテーマが、協働を増やし、メンバーをつないだと確信している。

(c)チームの影響で、(教養社会を履修していない)他の生徒が新聞を読みはじめた

本報告内に、「知識のメッセンジャー」という言葉を幾度となく記述した。NIE実践指定校となってから、新聞閲覧コーナーを設置しているが、教養社会以外の生徒がコーナーに毎日立ち寄り、教養社会メンバーがほかの生徒をコーナーに連れてきたりする機会が多くなった。前年度はNIEを実施していなかったため、直接比較できるものではないが、NIE活用と、授業との相性は良好なものであるという認識に至った。

(d)教養社会の授業が生徒の「オアシス」になった〔注13〕

本授業を履修する生徒の中には、(通常のクラスでも同様だが)さまざまな事情・悩みがある。「教養社会」の時間は、一瞬一瞬すべてに集中し、緊張の連続というわけではなかった。週の初め、1・2時間目に実施した授業では、前の週に起きたできごとに対する悩みを吐露する時間もあった。「通常の授業よりも、教養社会の居心地がよかった」という生徒が2年間共通して存在したことで、本授業が、悩む生徒の「居場所」的役割を持つことがわかった。「オアシス」と言い切るのは大袈裟かもしれないが、緊張から緩和に変化する生徒がいた、ということだけは記しておきたい。

## 5 終わりに ～今後のカリキュラムへの影響に関する考察～

図書館を利用した授業中、4年(高1)で探究型授業を実施するクラスと、場を共有することがあった。同じ部活動の後輩が、先輩(教養社会メンバー)のタブロイド制作を見て「何してるんですか」と言いながら話しかけ、先輩は「ちょっとやめてー」と言いなが

らも、まんざら悪い気はしていない、という場面が見られた。

2022年度、授業者は、4年（高1）で担任を受け持ち、学年では「総合的な探究」の指導計画・指導案作成を担当している。本実践を現在の形で開始する時、NIEをともに取り組む教員と話をしたところ、「教養社会は、総合的な探究の先行研究となる」という話題が出た。以来、本実践で取り組んだことが、探究に与える影響について想定しながら進めてきた。

「教養社会」は、ここまでの期間で「個々のテーマを選び、深掘りする探究」と「時事問題を起点として、広い視野を維持しながら進める探究」を、それぞれの年度で実施してきた。この2つを両立できる授業実践の達成が、近い将来、さらに探究への影響を強めることになると考えている。今後も、「総合的な探究」にとっての旗手でありつづけるため、授業テーマ・方法ともに精選し続けたい。

最後に、本実践を開始・継続するにあたり、情報共有も全面協力していただいた6年（高3）学年担当の先生方、本来のカリキュラムを超越した担当表を認めていただいた地歴公民科をはじめ、本実践にご協力くださったすべての皆様に感謝の意を表し、実践報告を終える。

---

#### 【脚注】

〔注1〕2021年度大学入試（指定校型）において「あなたが最も関心の高い社会問題は何ですか」と質問されたことに対し「人種差別」と答えた生徒が、具体例や理由をさらに聞かれたあと、回答できなくなった。受験生本人はもちろん、学年の公民科担当として「しっかり話ができるトピック」の重要性を痛感した。

〔注2〕生徒の記録については、2020年度の高校3年生から、「e-Portfolio」が開始される予定であったが、結果として義務化されることはなかった。ただし、大学ごとに課すエントリーシートや志望理由書などに、活動の記録を要求されることは多くあった。「電子」ではないものの、大学側が受験生に「ポートフォリオ的内容」を求めることは確実にあった。

〔注3〕富士通「Scansnap SV600」は、書画カメラと同じく、新聞など大きな面をスキャンできる機種である。ここで取り込んだファイルは、Google Classroomのフォルダに保存し、教養社会メンバー間でも共有した。なお、取り込みに際し、記事の面積や部分について、著作権には最大限配慮した。

〔注4〕担当したクラスの担任と相談し、生徒によって、入試の最終審査がスピーチ単体であったり教材を提示したり、プレゼンソフトを利用したりと、種類が多いことがわかった。「パワポに限ったことではない」というルールは、これらに対応するために設定したものである。

〔注5〕従来「教養地歴」「教養公民」は、それぞれ通年2単位の授業で、担当者も別の教員であった。これに対し、2021年度から、この2科目を一括し、4単位をひとりの担当で持つこととした。ただし、カリキュラム上は現在も2種類の授業となっている。課題による評価は、両科目で共通（並行）して付けている。

〔注6〕新聞閲覧台は、NIEによるアドバイスで、1台が寄贈された。しかし、6紙を閲覧するには閲覧台が3台必要であった。本校に稟議し、のこり2台と、新聞ラックの購入が決定した。

〔注7〕6新聞社（朝日・読売・毎日・日本経済・産経・東京）から4か月間（実質）無償で配送されるコースと、3新聞社（上記6社から選択）を8か月間配送するコースがあり、本校では前者を採用した。

〔注8〕授業者は、大学の卒業研究でプロ野球ファンとメディアとの関連性について扱った。そのきっかけとなったエピソードが、1992年（平成4）年の日本シリーズ（ヤクルト対西武）第1戦、延長12回裏に、杉浦亨選手が放ったサヨナラ満塁ホームランであった。

〔注9〕2チームに分かれた生徒は、それぞれ「フリップ表示」「ビデオ撮影」「スピーチ」「サポート」を分担した。

〔注10〕PR行動の前日、安倍晋三元首相が銃撃される事件が発生し、報道には緊張感が伴っていた。授業者から管理職に確認し、「投票行動の呼びかけと、同事件とはつながるものとは考えていない。のびのびやればよい」という後押しも、この指導につながった。

〔注11〕授業者は、中学生のころから、最寄り駅（JR埼京線・大宮）の駅頭で、朝6時から声掛けを行う弁士が気になり、のちにその人物が、日本新党の枝野幸男議員（現・立憲民主党）だとわかった。選挙に対して関心が高まったきっかけであった。また、同氏は、民主党・菅政権時代に官房長官を務めた。

〔注12〕動画の作成に使用した機材・ソフトは以下の通りである。

機材：HP Envy 360-13 および Apple iPad mini 6

ソフト：Windows Movie Maker および inShot

〔注13〕本年度は、15名中、高校サッカー部所属生徒が7名おり、土曜に公欠、月曜のみ作業する、タイトなスケジュールを強いられた。月曜は、その多くが試合明けで、試合の反省や復習から始まることも多かった。授業アンケート・自由記述で「試合の愚痴こぼしてすみません」というコメントもあった。

以上

#### 【参考文献】

トニー＝ブザン・2008「マインドマップ超入門」（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

金子正晃・2014「デジタルマインドマップ超入門」（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

北田荘平・2020「伝わる図・グラフ・表のデザインテクニック」（MdN）

佐藤優／池上彰（共著）・2016

「僕らが毎日やっている最強の読み方

新聞・雑誌・ネット・書籍から『知識と教養』を身につける70の極意」

（東洋経済新報社）

たかまつなな・2019「政治の絵本 学校では教えてくれない選挙の話」（弘文堂）

山本博幸・2019「日経新聞を読む技術・活用する技術」

（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

プチ鹿島・2019「芸人式 新聞の読み方」（幻冬舎文庫）

森下辰男・2022「こんな選挙でもまたあなたは棄権しますか」（文芸社）

宇野重規・2022「いつか選挙に行く君に知っておいてほしいこと

SDGs時代の正しい主権者になろう」（学研プラス）

山本博幸・2018「図解 とりあえず日経新聞が読める本」

（ディスカヴァー・トゥエンティワン）

以上

共同研究者

（代表）浜 彰史

黒田 雅幸